

# 雛祭と御馳走

山田 徳兵衛

一昨年のお節句「子供の時間」の放送を引受けた時……。

話題は勿論、雛祭の事であるが何かプランを考へるよう  
に御係の方から申渡されたので、色々考へた結果、小  
學校の女生徒さんを相手に雛壇の前で對話をしようと思  
つた。

いや對話さいふより、雛壇の上の飾料やら雛の由來なご  
について質疑應答するプランを立てた。

ところで、一體どんな事を聞いて貰つたらよいか、この  
問答が聴取者なるお子さん達の参考にならなければいけな  
いと思つて、ひみつ少女達の聴きたがる事をテストしてか  
ら筋書を作らうと思つて、まづ尋常五六年の少女達を五六  
人雛壇の前へ招いで、放送の事は話さずに「雛壇を眺めて  
なんでも聴きたい事をきいて下さい」と云つてみた。

全然、白紙の少女達は暫く顔を見合せて笑つて居たが、  
やがて口を切つたのが「あの菱餅はさうしてあんな形をし  
てゐるのですか」續いてもう一人は「なぜお雛様に蛤や榮螺  
を上げるのですか」さういふのであつた。

なほ續いて出た質問が豆煎まめいりの由來如何さういふのではない  
か！

自分は日頃の蘊蓄を傾けて「そもそも雛人形は……」  
とかなんぞか大いに名答を下さんものミカんで居たさう  
ろ、小さい女生徒達に完全に肩すかしを喰つたかたちで思  
はず苦笑して仕舞つた。

つまり少女達のインテレスト(?)はお人形やお道具よ  
り、まづ第一に供へ物即ち食へ物にあつたのである。

自分は聊か驚いて、今度はこちらから人形や御道具につ  
いて質問をしてみるミ、それに對し少女達は相當によく答

へが出来た。

無論委しい來歴は知らないが其の概念をよく掘んでゐる返事であつた。

自分は大いに頼母しく思つた。

で、これは學校の先生や家庭の人々から何時いつもなく佳い説明を聽かされてゐるんだな……さ感心し、安心し、そしてお雛様の普遍的なる威力を今更に感じ入つた。

◇ ◇ ◇

自分は放送の筋書すぢがきに、此の少女達の本心であるまごころの菱餅や、豆煎の御馳走の質問も勿論盛りこんで、その處の答は「それは餅は餅屋もちやといふ昔からの文句の通りですから委しくはお餅屋さんに聽いて下さい」ミお茶をにごして人形やお道具の説明をまごして纏めたが。

しかし、あみでこんな事を考へてみた。

まごころに可笑しな話で又、當然の話であるが食くべ物もの、こいふものは人間の誰たれもが最も關心を持つもつこいふ事である。

これは餘りに當り前あたの話ではあるが此際一寸首をひねつてみてもよい事かと思つた。

或る先輩がこんな事を云つた事がある。

「年中行事で、特色の有るおいしい食くべ物の附帶してゐるものは廢すたらないが、食くべ物に楽しみの尠いものは兎角永續ぞくぞくがしない。五節句のそれごとくを見てそれが判る」ミ。

これはほんの一面觀であらうが、たしかに一つの眞理だと思はれる。

幼時を憶ひ又は故郷を懐しみ、又はおいしくて忘れられぬ食くべ物があつたなら、その行事はなかく忘れられるものでは無いだらう。

まごころで三月の雛祭……これが少女達の爲めにまつたくよい年中行事であり獎勵すべきものであるとしたら……まづそのお節句の意義や飾料の由來等について少女達がよく理解するよう（そして多分のインテレストを持つよう）説明する事が必要であると共に、その供くべ物もの即ち食くべ物の問題を考へてこれを大いに利用すべきでは無いかと思ふ。

◇ ◇ ◇

いつか乃木將軍の傳記を讀んだ時、將軍が那須に居られ

頃の一節に「將軍は三月節句には豆煎を、五月節句には粽を必ず作らせて食べられ又近隣へ振舞はれた」を書かれてあつた。

自分は此時ほんごうに將軍の心持を知つた様な氣がして非常な親しさを感じた。

豆煎や粽をほいばる將軍の風采を想像する時自分は將軍が其上になつかしくなつた。

將軍の几帳面なる一面を物語ると共に、將軍が幼時の味を忘れかねて楽しみに喰べられたのではあるまいか。

お節句だから云つて何も傳統的の食べ物ばかりに偏すべきでは無いが、

1、平素に作らぬ雛祭獨特のもの

2、云ひかへれば、季節的なもの

(永い間の冬籠りの氣分から初めて憧れの春に會ふ様なもの)

3、その郷土に傳はるもの、又は吾家傳來のもの

4、少女達の最もおいしいもの

(これは種類の新舊を論ぜずショートケーキでもチョコ

レットでも決して差支へなし)

こんな點を考へに入れて御馳走を精々ふんばつする事が、この佳き年中行事を、より旺んにし、より永遠性を有たせるものとなるのでは無いかを考へた。

それは千年の昔に源を發するわが雛祭が常に潑刺たる幼年を交渉を持つ爲め永遠に、時代に生きて行く可能性があるあるこゝろ丁度合致する事であらう。

「古くそして新しく」これが雛祭を行ふ上の心構へ第一課ではあるまいか。(終)

手のひらにかざつて見るや市の雛 一茶  
 襖開けて次も廣間や雛祭 和香女  
 はつ雛や老の後なる娘の子 左繡